

## 新村聡氏の書評に答える

星野彰男

本誌53巻2号に掲載された拙著『アダム・スミスの経済理論』に対する新村聡氏の書評において、主要各章への「疑問点」が提起されたので、それらについて答える。

(1) 第2章「才能論と価値論」の関係について、スミス自身が「生産物の価値を増加させるには、…か、…労働者の生産力を増す以外の方法はない。」(WN, II. iii)と明言している。リカードはこれを「富の増加」との混同だと批判したが、拙著では「混同」していないことを再三論証している。本来、この挙証責任は、弁護側より批判側の方がはるかに大きいはずだ。なお、拙著では言及していないが、D.ヒューム『政治論集』(1752年)は労働能力改良を含む「勤労の増加」を一大テーマとし、それに伴う貨幣の流通必要量の増加(→事実上の価値増加)を捉えていた。スミス分業論は、これを受け入れた上で(WN, II. iv)さらに詳論・具体化したものと思われる。新村氏も局部的な才能価値の増加を認めているが、これが積み重なれば、才能価値の平均水準も上昇しうるのではないか。

(2) 第3章について、新村氏は「著者は、商業社会を未開社会と同一視し」と述べている。だが、拙著では商業社会について、「そこでは、資本蓄積が省かれたのだから、生産要素としては人間労働しか存在しない。そして、スミスはそういう始原的状態での交換の論理を解明するために、初期未開社会での狩猟の例を採り上げた」(50頁)としている。つまり、スミスは交換の論理的始原を主題とし、その一説明例として歴史的始原に言及したものと、著者は理解し

た。したがって、著者は両者を「同一視」してはいない。

次に、商業社会と付加価値について、そこでは、労働能力行使に比例する価値を形成するだけで、価値を「付加する(add)」べき対象(資本価値)は無いものと想定されており、スミスも「付加する」という言葉は使っていない事実を、拙著は尊重したにすぎない。

資本制社会における農林水産業や鉱業での原料不在の場合の付加価値論については、その他の資本資材価値に付加するという観点だと解される。つまり、スミスはmaterialを、「原料」だけでなくその他の資本資材をも含むもの(不変資本)として使っていたと思われる。その意味で、「原料」という訳語は狭すぎた。

(3) 第4章について、スミスは商業労働と運輸労働をとくに区別していない。

「自然の諸力の生産物」等に基づく地代を「生産部門からの価値移転」と見なす拙著の解釈は、「根拠となるスミスの明確な記述を欠いた著者の推論にすぎず、無理がある」とされるが、拙著ではいくつかの「根拠」を次のように挙げている(71-76頁)。

① 当該文章(WN, II. v)中では、地代価値を「再生産する」とは言わず、「再生産を引き起こさせる(occasion)」と繰り返し使っていること。

② 「自然の諸力の生産物」の格差が地代格差の根拠とされ、これを裏付ける価格要因として、「地代の高低は価格の高低の結果」(WN, I. xi)だとされていること。つまり、最劣等地での「価格の高低の結果」としてその他の優等地での「地代の高低」=差額地代が決まること、それらの

「高低」は「需要による」から、その負担は消費者が負うことを、スミスは事実上捉えている。

③ 地代の「価値を付加する」と言う場合は、その直前の文脈で、商業利潤を「付加する価値」部分が生産部門から配分されるものとスミスは捉えていること。④『国富論』の「序論」では、「有用労働」（生産的労働の意）だけが富裕化の「元本」として挙げられ、土壌を含む自然条件は富裕化の「元本」から明白に除かれていること（拙著、48-49頁）。

(4) 第5章について、スミスの価値尺度は

リカードの言う賃金でなく、労働能力であり、ある標準労働能力に基づいて時間換算されていくというものである。その意味で、それは不変の価値尺度と見なされる。また、スミスは賃金のような可変の価値尺度を退けている。

(5) リカード以来、スミス価値論をあげつらう傾向が強かったが、そうでなく、もっと大局的にその長所と思われる視点を現代に活用できるということが拙著の主眼である。

(星野彰男：関東学院大学名誉教授)